

ジャカルタで考える

— World Economic Forum on East Asia に参加して—

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめに

(1)おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

(2)私は、先週の土・日・月の3日間、インドネシアのジャカルタに行ってきました。何のために行ったのかと言いますと、毎年1月末にスイスのダボスで World Economic Forum、世界経済会議が開かれており、その地域版の一つである東アジア経済会議、World Economic Forum on East Asia に参加するためです。その会議は持回りで、今年はインドネシアのジャカルタで6月11日(土)、12日(日)、13日(月)の3日間開かれました。私もその会議に参加させていただきましたので、そのお話を少しさせていただきます。

2. ジャカルタで考える— World Economic Forum on East Asia に参加して—

(1)私がこの会議に参加するのは今回が11回目でしたので、だいぶ慣れてきました。今回のテーマは、新しいグローバリゼーション、地球化にどのようにこたえるかということでした。非常に大きな自然災害や雇用をどのようにするのか、持続的な発展をどのようにするのかという基本的な問題についてのお話がありました。その中でいつもいつも話題になったのは、日本の東日本大震災についてでした。ぜひ早めに回復していただきたい、支援は一所懸命に行うということをお聞きして、本当に有り難いなと思いました。

(2)私はこの会議に11回参加させていただいていますが、今回非常に感じたことが一つあります。それは、インドネシアだけではなく、タイやベトナム、カンボジアをはじめ、以前から参加しているシンガポールやマレーシア、中国などの若い方々のレベルがものすごく上がってきたということです。本当に流暢な英語を話します。10年前には考えられなかったことですが、みんなが議論に参加していて、どこからこんな人が来たんだと思うくらい、ものすごく能力の高い35～45歳ぐらいの方が各国に激増したというのが私の率直な感想です。

(3)では、なぜこのようになったのかと言いますと、今アメリカやヨーロッパは非常に景気が悪いのです。若い頃から非常に熱心に勉強して、ベトナムなどでは難民というかたちでアメリカやヨー

ロッパに行った方々がいます。その方々は、そこで非常に高いレベルを要求される仕事に就いて、具体的に言えばエリートとして、給料もたくさんもらっていました。しかし、今アメリカやヨーロッパが非常に景気が悪いために、その方々は自分の思うような仕事に就けなかったり、また、リストラにあたりしてしています。それならば、母国に帰って祖国の発展のために尽くそう、また、新興諸国に行って別の人生を歩もうと、母国である東アジアや新興諸国に戻って活躍の場を求めているという状況なのです。その結果、今回の会議にも 35～45 歳ぐらいの若くて優秀な方が大量に登場してきたということです。本当に驚くほど数が多いです。10 年ぐらい前は英語を話せる方はあまりいませんでしたが、今回の会議では多くのそのような若くて優秀な方々が活躍をしていました。議論に積極的に参加をし、非常に高いレベルで意見も述べていることがわかりました。

(4) 日本は津波や震災、原発事故などで本当に大変な状況であります。つまらない権力闘争や権力争い、政治の争いなどが続いており、国がなかなかうまく機能していません。しかし、そんなことをしている場合ではないと私は思いました。世界の日本に対する温かさはありますが、早めに一所懸命に国を立て直さないと、今まで日本で優れていたことが、その間に全部他の国に持って行かれてしまいます。日本はうかうかしてられません。ですから、政治のほうは早めに決着をつけていただき、日本が心を一つにして世界との競争に勝たなければいけないということを痛感してきました。

(5) また、会議に参加をして感じたことは、英語の力です。やはり英語で一番大事なのはリスニング、つまり聞き取る力です。同時通訳のレシーバーで聞いている方もたくさんいらっしゃいましたが、できればレシーバーなしで同時通訳を使わずに、自分の耳で聞いて、自分の言葉で英語で発言することが一番よいのです。そこで、リスニングの能力を高めるためにはどうしたらよいかというお話をさせていただきます。

(6) 英語を聞き取る力をどのように高めたらよいかについて、里中哲彦さんという方が東京新聞に 3 月にお書きになった「英語の質問箱」という箇所から参考にさせてもらい、お話をさせていただきます。

(7) リスニングを向上させるためには声を出して英文を読む、つまり音読を繰り返すことが一番大事であるというのが里中先生の御意見です。これは意外に思われるかもしれませんが、英語の聞き取り能力、リスニング能力を高めるには、まず口を鍛えることが一番大事だということです。なぜかと言いますと、自分で発音できない音は聞き取ることもできないからだというのが里中先生のお考えです。英語の発音がきちんとできなければ、ネイティブスピーカーの発音を捉えることはできません。

(8) トロイの遺跡を発掘したことで有名なシュリーマンという方は、独学で 18 の言語を習得した語学の天才です。彼は、語学の学習の秘訣として、非常に多くの文を音読することを挙げていま

す。また、同時通訳の神様とまで言われる國弘正雄先生は、「只管（しかん）朗読」、つまりひたすら朗読をするという学習方法を唱えて、意味がよくわかっている英文を繰り返し繰り返しひたすら音読することを勧めています。里中先生が、何回ぐらい音読をしましたかと國弘先生にお尋ねしたら、「中学生のときは一つのレッスン(課)について 500 ～ 1000 回読んだ」と平然とおっしゃったそうです。意味のわかっている英語を繰り返し繰り返し読む、一つのレッスン(課)について 500 ～ 1000 回読む音読が、リスニングの向上に非常に役に立つということでもあります。

(9)このように、音読、声を出して英語を読むことがリスニングの向上に役に立つことは、多くの英語の達人たちによって証明されています。この放送をお聴きの皆さんも、これからは世界の方々と競争しなければなりません。そのためには、英語の聞き取り能力を身に付けなければなりません。その一番大事な方法の一つとして音読、よくわかる英語の文章についての音読をリスニング学習に取り入れることが大事だと思いますので、今日は御紹介させていただきました。

3. おわりに

これから先で大事なものは、世界の方々と英語で渡り合うことです。ぜひ皆さんもがんばっていただきたいと思います。

— 2012 年 2 月 3 日改訂 —